

エジプト

木村佳寿美

「きむらかすみ」ベリーダンサー

自分のなかにある熱いものを 表現できる踊りに出会えた

聞き手：佐藤幸治（カイロ日本文化センター副所長）

エジプトで一流の踊り手として広く認められ、日々ホテルのナイトクラブや結婚式で自身の楽団を率いて公演を行なうかたわら、エジプトと日本両国で指導・普及に努めている氏に、カイロで話をうかがった。



1995年にベリーダンスと出会い、米国、トルコ、エジプトで著名振付師について猛特訓。97年にカイロの高級ナイトクラブでプロデビュー。エジプトと日本を歩き来しながら活動中 写真提供：木村佳寿美（以下も同じ）

映画でサロメの踊りを見て
心を奪われた

——ベリーダンスとの出会い、きっかけは？

木村 短大を卒業したころから、バレエ、ジャズダンス、ヒップホップ

プなどを踊り、教えていただきました。でも、自分のなかにある熱いものを表現できる踊りに出会えていないという感覚がいつもあり、それを探していました。

そんなとき、『情炎の女サロメ』

というハリウッド映画で、ヨハネの首を求めてヘロデ王の前で7枚のペールを脱ぎながら踊るサロメのシーンを見ました。新約聖書のわずかな記述から想像力をふくらませてつくられた物語の官能性・神秘性に心奪われました。

のちに、その踊りがベリーダンスであり、本場はエジプトをはじめとする中東であると知りました。中東は紛争のイメージがあり怖かったのですが、カリフォルニアでアメリカ人から1カ月の集中レッスンを受けたのが始まりです。

——本場ではないアメリカでのレッスンは満足できましたか？

木村 踊りから小道具の使い方までテクニクは一通りマスターしました。帰国後、東京のレストランで踊りながら、カルチャーセンターで教え始めました。でも、自身が未熟でさらに修行が必要だという意識もあり、アメリカ人はエンターテインメントとして以上には消化しきれないと思ったので、トルコで一番有名なネスリン・トプカピという方に師事することにしました。

当時は日本でもインスタラクターの仕事が続け、まとまった休みをつくっては出かけていくというやり方でした。でも、トルコでやっていくうちに、究極の本場はエジプトだと思い知り、行くことにしたわけです。

身体的な美しさがピークのとときに
一気に階段を駆け上る

——トルコとエジプトでは、何が違うのでしょうか？

木村 トルコでも使う曲はエジプトの曲なんです。しかし、オンム・クルスームなどが歌ったアラビア語歌詞の音楽をちゃんと解釈して踊れるのはエジプト人、アラブ人に限られます。それから、ハリレムで発展したオスマン・トルコのベリーダンスには、王を魅了するためエロティックな部分を強調している面もありました。それだけではイヤだ、歌詞やストーリーを表現するアート性を自分は追求したい、という強い気持ちがあったので、エジプトに向かいました。

デンデラの遺跡に「歌と踊りは神々の食事である」という碑文が刻まれているように、ここでは古

多も多、踊ることも多い。結婚式では子どもと女性を呼ばれ、結婚式で子どもと女性を呼ばせることが秘訣。エジプトのアーミークラブにて



代から生殖・出産・美・音楽を司るハトフル女神に対する供養としてベリーダンスの原型が踊られていたのですから。

—現在のエジプトにそのような多神教的豊穡さは残っているのでしょうか？

木村 いまでも音楽、映画、踊りな

ど、芸能の中心はエジプトで、ここで人気を得てから中東全域にマーケットを広げていくんです。ベリーダンスの芸術性を表現する要の楽団もすばらしい。そして、ここには目の肥えたオーディエンスがいっぱいいる。小さい子でも音楽にあわせて立派に踊るのは、DNAとしか、いいようがありません。

—エジプトでプロとしてデビューするまでには、どのようなプロセスを経ましたか？

木村 95年からイブラヒム・アーキフという、スターダンサーに指導する振付師の集中レッスンを受けているうちに、本場で自分が通用するか試したいという気持ちがつぶつと湧いてきました。最高峰であるカイロの5つ星ホテルのナイトクラブで受け入れられる振り付けを指導してもらい、97年にマリオットホテルのオーディションに合格、その後もシェパードホテルなどと契約を結ぶことになりました。

—並大抵の努力ではできないことですね。

木村 踊りという芸術の性質上、身体的な美しさのピークにあるときに階段を一気に駆け上っていく集中力が必要です。ここががんばらないと、日本で踊りの先生で終わってしまう。ものすごい集中力で取り組みました。アポイントや約束を何度かはぐらかされたりしながらも、めげずに突き進みました。

日本人では前例がなかったことも、大きな障害でした。もっとも、イスラームの国では、ダンサーが貧しい階層からしか出てこないという特殊性があつて、慢性的な欠員を埋めるために、西洋人が90年代あたりから活躍してはいました。でも、日本人を含め東洋人はいなかった。

エジプト人はみんな踊りが大好き。これは血といつてもいい

—プロで踊る舞台はどのような場所ですか？

木村 ひとつが、5つ星ホテルのナイトクラブやナイール・クルーズ船でのレギュラー公演。もうひとつが、結婚式です。これまでに1000組以上のエジプト人カップルの門出を祝いました。

—結婚式に、外国人のダンサーを呼びたがるものなのですか？

木村 結婚式にベリーダンスを呼ぶ人には二通りあつて、ひとつは司会なども含めて盛り上げてほしいからエジプト人に頼む場合。もうひとつは、イスラーム的にはベリーダンスはハラーム（禁忌）と考える向きもあるなかで、異教徒の外国人との距離感がその後ろめたさを緩和させてくれるという理由で私に頼んでくる場合。

—そんな状況でも踊りを呼びたいなんて、人間と踊りは切つても切れないものなんですね。

木村 結局、エジプト人はみんな、踊りが大好きなんです。これは血だといつてもいい。でも、ムスリムとしては歌も踊りもいけない。その狭間にあつて、「見るだけなら」「結婚式なら」と、適当に調節しながら歌や踊りを楽しんでいくんです。その微妙さに私はとても興味がある。踊りを自分の道として純粹に真剣に追求していること、その道半ばで気づかされることがいっぱいある。そこに醍醐味があります。